

今年は、コロナ(COVID-19)に始まってコロナで終わるとしています。そして、十一月二六日付のWHO発表では、世界中で六千万人以上の人人が感染し、百四〇万人以上の人人が亡くなられていることがあります。それは、私たちにとりましては、救い主を待ち臨む思いをいつそう強くさせられる状況といえます。なぜなら、これは一人一人の力だけではどうしようもない事態だからです。

一人一人、各地域、各国で対策すれば乗り越えられるということではありません。国と国、地域と地域、そして人と人が互いに助け合い支え合つて対処しなければ、とても大きな影響を及ぼしておることです。

コロナは私たちの健康面にとどまらず、経済の面においても大きな影響を及ぼしており、職を失うことにより毎日の生活に困窮をきたしている人も増えてきています。

戦火を逃れ、難民キャンプで生活する人たちにとっては、このコロナが更なる追い打ちをかけているというニュースを聞くと胸が痛みます。さて、そのような中で私は、救い主のご降誕を迎えました。親にとつて我が

ヨハネによる福音書第三章十六節「神はその独り子をお与えになつたほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」

主教 イグナシオ 入江 修

神はその独り子をお与えになつたほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るために、神はその独り子をお与えになつたほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためにあるためである。(ヨハネ三十二)

私たちに対する神さまの愛は、親にとつて自分の死よりもはるかに辛い我が子の苦しみと死を引き受けられるという姿で現されました。

神さまは確かに、ご自分が創造された私たち一人一人を深く愛してくださっています。その愛を受けてすべての隔たりを越え、繋がり合うことで、私たちは神さまの愛に応えてゆくことができるのではないか。そこには、神さまは大切な独り子世に、神さまは大切な独り子を与えてくださいました。罪の結果死に支配されていた人の世に、神さまは罪に陥りその罪から離れることができない人間の手に、その人間を死から命に救うための犠牲として御子を引き渡されました。御子は人間の手によって十字架に掛けられ、苦しみを受けて死なれました。親にとつて我が家は作り出した境界線など意味を持ちません。人が分かれ分かれとなり、互いに足を



発行所 日本聖公会 横浜教区教務所 〒221-0852 横浜市神奈川区三ツ沢下町14-57 TEL 045-321-4988 FAX 045-321-4978 発行人 入江 修 1部 55円 〒別



十主教
イグナシオ

一日に生かされて参ります。

十二月二十五日が降誕日

の一年が終わりに近づく頃、主教館の周りの木々は順に葉を落としてゆきます。

今年は夏前に、櫻の枝をだいぶ落いましたので、去年に比べると落ち葉も少なくなっていますが、それでも道に落ちる櫻の葉がだんだんと増えてきました。

四季の移り変わりを肌で感じさせられると同時に、教会暦もまた新たな一年の初めである降臨節(アドベント)に入ります。

この時期になると、朝の礼拝をささげている時、

それは新しい一日の始まりで、東側の窓から太陽の光が射し込んできます。

それはクリスマスのお祝いであり、闇が光に照らされ消え失せていくようすを現しています。

そして十一月、北半球の話ではありますが、冬至を迎える。一年で太陽の光が最も弱まる季節です。

しかし、そこから太陽はその輝きを増し、ちょうど

私たち、降誕日から始まるこの降誕節の白の期節を、最も小さいお姿で世に来られた主イエスさまを救い主キリストとして礼拝する時として守り、聖餐において文字通りキリストを私たちの内に迎え入れる時と

その道を私たちが歩んで行くこと、それが救い主キリストをお迎えすることであり、クリスマス、すなわちキリストを礼拝するということなのだと思います。

私たち、降誕日から始まるこの降誕節の白の期節を、最も小さいお姿で世に来られた主イエスさまを救い主キリストとして礼拝する時として守り、聖餐において文字通りキリストを私たちの内に迎え入れる時としていきましょう。